



萩原氏は、1997年の神戸連続児童殺傷事件の少年が「犯行声明文」に書いた「透明な存在としてのボク」という「実存的

な悩み」に共感する若者の存在に注目する。氏は、自己の存在感が質感・量感ともに無化している状況が進行しているとし、現在の居場所をめぐる問題は、数量的データで可視的に説明しようとする

と「すり抜けてしまふ」と警鐘を鳴らす。

学童保育や放

課後子ども教室を単なる子どもの居場所ではなく「成長を促す教育の場」、「生きる力をはぐくむ場」としたりするなどの教育言説を氏は批判し、子どもにとっての居場所が、意図的操作的なまなざしに満ちた教育的空間からの子どもたちの生の「逸脱」あるいは「逃走」であったという歴史的・社会的な意味や経緯



居場所

生の回復と充溢のトポス

萩原建次郎 著

2500円 春風社
☎045-261-3168

を対峙させる。

神戸連続児童殺傷事件から20年以上たった今、評者は、多くの若者が「リア充」を志向し、「実存的な悩み」から「すり抜けて」しまっているように感じる。だが、彼らのリア充志向は「共存の作法」としては有効であつても、「生の回復と充溢」にはつながらない。このとき、

学校に通っている子どもたちに対しては、居場所の一つとしての学校の役割は大きい。そこには、個人としてか、社会人としてかを超えて、充実して今を生きるプロセスをたどるための「第3の支援」が存在すると考える。話を聞いてくれる、肩を押してくれるなどの個に対応した居場所的な支援がどのように行われているか。そこには、意図と操作を保留して見守り、状況に対応する教師の「現場力」があるはずである。これを評価し、交流・蓄積することが求められているといえよう。(前聖徳大学教授・西村美東士)